

Ⅳ. 植 生 図 Vegetationskarten

1. 現存植生図 Karte der realen Vegetation

塩那道路の中塩原一板室間51.8kmに沿って、3～5kmの幅で現存植生図が作製された。植生図作製にあたっては25,000分の1の地形図が基図として用いられた。凡例は以下に示される自然植生8、代償植生8、その他2、計18で描かれている。

a. 自然植生 Natürliche Vegetation

塩那道路周辺は比較的広く自然植生が残されている。特にコケモモトウヒクラス域では大部分が自然植生である。

1) シラビソ-オオシラビソ群集, コメツガ群落, アカミノイヌツゲ-クロベ群集

シラビソ-オオシラビソ群集をはじめとする亜高山針葉樹林が一括して示されている。日留賀岳, 鹿又岳, 男鹿岳, 大佐飛山などの山頂, 稜線付近を中心に生育している。

2) アスナロ群落

稜線や細尾根に生育しており, 上方は亜高山針葉樹林, 下方はモミ林に隣接している。個々の



Fig. 28 クリーコナラ群集 (塩原町大綱海拔560m)。

Castaneo-Quercetum serratae (Oami, Shiobara-cho, 560m ü. NN).

植分の生育面積は狭いが、ブナクラス域に広域的に分布している。

3) コカンスゲーブナ群落

コカンスゲーブナ群落は植生図上で最も広い面積を占めている。特に大蛇尾川、小蛇尾川や木ノ俣川の上流域ではコカンスゲーブナ群落の占める割合が大きいの。

4) クリーコナラ群集, アブラツツジーアカンデ群落

板室や中塩原付近に小面積で示されているにすぎない。多くは那珂川やその支流の木ノ俣川沿いの急斜面に残されている。

5) ジュウモンジシダーサワグルミ群集

河川の上流に流れに沿って細長く生育している。面積的に狭く、小蛇尾川、男鹿川、矢沢の上流に分布している。

6) ケヤキ群落

ケヤキ群落は中塩原の箒川沿岸に生育しているが、植生図上では極く小面積にすぎない。

7) ハイマツ群落 (アカミノイヌツゲークロベ群集ハイマツフェシス)

ハイマツ群落は鹿又岳から日留賀岳にかけての山頂・稜線に生育している。植生図上では細長く帯状に示されている。

8) ナナカドーミネザクラ群落, ホツツジーシロヤシオ群落

風衝低木群落は鹿又岳や日留賀岳、長者岳の稜線に生育している。地形的な局地的植生であるため、植生図上に占める面積は狭い。

b. 代償植生 Ersatzgesellschaften

文化景観域の中塩原や板室周辺では自然植生は少なく、コナラ林、スギ植林、カラマツ植林、ススキ草原などの代償植生が広い面積を占めている。しかし山岳地帯では多くは自然植生によって占められ、代償植生は少ない。

9) チシマザサーダケカンバ群落

ブナクラス域上部以高の山岳斜面に生育している。雪崩地や谷筋のダケカンバの持続群落も同一の凡例で示されている。

10) クリーミズナラ群集, クリーコナラ群集

クリーミズナラ群集はブナクラス域の主として道路沿いに生育している。代償植生としてのクリーコナラ群集は板室周辺や塩原周辺で大きな面積を占めている。植生図上では両者は一括して示されている。

11) 崩壊地先駆性植物群落

塩那道路の崩壊性法面に生育しているネコシダーヤハズハンノキ群落、ニシキウツギーミヤマヤシャブシ群集、クマイチゴ群落、ヒメノガリヤス群落、アカシヨウマーフキ群落などの崩壊地植生が一括して示されている。法面植生であり、植生図上の面積は狭い。

12) クマイザサ群落, チシマザサ群落

ササ草原は大佐飛山, 日留賀岳, 鹿又岳, 男鹿岳付近の稜線やその側斜面などに生育している。大佐飛山や鹿又岳周辺では比較的大きな広がりを示している。

13) アズマネザサーススキ群集, メドハギーススキ群落

ススキ草原はブナクラス域下部の塩那道路の路側に生育しているが, 植生図上の面積は狭い。またスギ植林初期のススキ優占群落のステージも同一の凡例で示されている。

14) 伐採跡地

森林伐採直後のクサイチゴータラノキ群集やベニバナボロギク・ダンドボロギク群集が示されている。板室付近に点在している。

15) 畑地雑草群落

植生図化対象地域は山岳地帯であり, 耕作地は稀である。中塩原や板室の住宅地周辺にみられる。

16) 水田雑草群落

畑地同様水田として土地利用されている面積は少ない。中塩原の箒川の沖積地に一部みられるにすぎない。

17) カラマツ植林

カラマツは中塩原側の弥太郎山や比津羅山周辺に比較的大きな面積で植林されている。

18) スギ植林

ヒノキ植林も同一の凡例にまとめられている。中塩原, 板室など広がっている。

c. その他 Sonstige

19) 崩壊地

道路沿線の二次的な崩壊地や雪崩地, 谷筋などの自然崩壊地が示されている。面積的には狭く, まばらに点在している。

20) 住宅地, 裸地

住宅地および人工的な無植生地が示されているが, 植生図対象地域には住宅地は少なく, 中塩原にのみ限られる。

21) 開放水域

貯水池, 川など。

2. 潜在自然植生図 Karte der potentiellen natürlichen Vegetation

これまでに植生調査された代償植生も含めた植生調査を整理, 比較検討の結果まとめられた現存植生単位をもとに潜在自然植生が推定された。さらに現存植生図および地形, 海拔高など立地条件を参考にして図面化され, 潜在自然植生図が縮尺 1 : 25,000 で作製された。以下に14の凡例

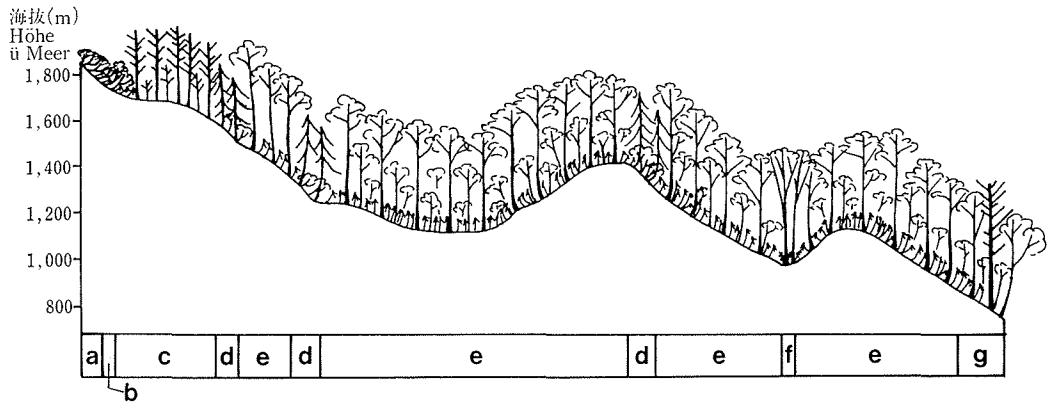


Fig. 29 日留賀岳南東部の潜在自然植生配分図

Schema der Verteilung der potentiellen natürlichen Vegetation auf dem SO-Teil des Bergs Hirugatake.

- a : アカミノヌツゲークロベ群集ハイマツファシス *Ilici-Thujetum standishii*, Fazies von *Pinus pumila*
 b : ナナカマドーミネザクラ群落 *Sorbus commixta-Prunus nipponica*-Gesellschaft
 c : シラビソーオオシラビソ群集, アカミノヌツゲークロベ群集 *Abietetum veitchio-mariesii* u. *Ilici-Thujetum standishii*
 d : アスナロ群落, ウラジロモミ群落 *Thujopsis dolabrata*-Gesellschaft und *Abies homolepis*-Gesellschaft
 e : コカンスゲーブナ群落 *Carex reinii-Fagus crenata*-Gesellschaft
 f : ジュウモンジンダーサワグルミ群集 *Polysticho-Pterocaryetum*
 g : クリーコナラ群集, アブラツツジーアカンデ群落 *Castaneo-Quercetum serratae* und *Enkianthus subsessilis-Carpinus laxiflora*-Gesellschaft

が説明されている。

1) シラビソーオオシラビソ群集, コメツガ群落, アカミノヌツゲークロベ群集

コケモートウヒクラス域においては自然植生が大部分の面積を占めており、現存植生と潜在自然植生とが一致しているところが多く、両者の配分は大差がみられない。したがってコケモートウヒクラス域で最も広い面積を持つ潜在自然植生は、シラビソ、オオシラビソ、コメツガ、アスナロなどを主体とするシラビソーオオシラビソ群集などの亜高山針葉樹林である。現存植生図同様に3植生単位が同一凡例で示されているが、アカミノヌツゲークロベ群集、コメツガ群落は岩角尾根地や細尾根上に、そのほかの適湿立地はシラビソーオオシラビソ群集が生育する。

2) ダケカンバ群落

雪崩地や山谷風の影響を強く受ける谷筋などの不安定立地では、土地的持続群落としてダケカンバ優占群落を潜在自然植生として推定される。今回の調査では、このようなダケカンバ林は植生調査資料が得られなかったため、ダケカンバ群落として示されている。ダケカンバ群落は大佐飛山や鹿又岳の細谷や谷に面した急傾斜地を中心に潜在自然植生域がみられる。

3) アスナロ群落

ブナクラス域の尾根部には、アスナロ、ブナ、イヌブナなどの針広混交林であるアスナロ群落が生自然植生として生育しており、現存植生が潜在自然植生と一致している。アスナロ群落はアカミノイヌツゲクロベ群集やコメツガ群落と置き換って生育しているほか、ブナクラス域上部では小面積ながらも散在し、ほぼ全域に潜在自然植生域をもつ。

4) コカンスゲーブナ群落

コカンスゲーブナ群落は調査地域において最も広い潜在自然植生域を占めている。尾根部や渓谷沿いなどを除く、海拔約900~1,900mの地域の適湿立地はコカンスゲーブナ群落の潜在自然植生域である。現存植生としても広い面積を占めている。

5) クリーコナラ群集、アブラツツジーアカシデ群落

那珂川や木ノ俣川沿いの急斜面に現存しているモミ、コナラ、アカシデ、イヌブナなどの混生する針広混交林は、周辺地域では箒川流域に比較的広い面積で残存している。これらの群落はかつてはブナクラス域下部を広く被っていたものと考えられ、現在の潜在自然植生と判定される。中塩原や板室に広い潜在自然植生域がみられる。

6) ジュウモンジシダーサワグルミ群集

洪水や増水による土壌の攪乱、多湿といった特殊な立地環境の渓谷、沢筋にはジュウモンジシダーサワグルミ群集が潜在自然植生として成立する。小蛇尾川や大蛇尾川、木ノ俣川、男鹿川に沿って帯状の広がりを持つ。

7) ケヤキ群落

ブナクラス域下部のジュウモンジシダーサワグルミ群集とほぼ同様な立地には潜在自然植生としてケヤキ林が成立する。ケヤキ林の残存植分は少なく植生調査資料が不十分のため、ケヤキ群落として示されている。気候的にはアブラチャンーケヤキ群集かオオモミジーケヤキ群集が成立すると考えられる。箒川やその支流、木ノ俣川、那珂川に潜在自然植生域が見出せる。

8) 河辺冠水植物群落（ヤナギ林その他）

洪水や増水によって立地の攪乱が繰り返される河辺氾濫原はヤナギ林やツルヨシ群集、カワラハハコーヨモギ群団などの潜在自然植生域である。植生図上ではこれらの群落は一括して示されている。ヤナギ林は植生調査資料が得られていないため群落単位は不明であるが、イヌコリヤナギ、タチヤナギ、カワヤナギ、オノエヤナギ、オオバヤナギなどが生育するものと考えられる。箒川下流からタチヤナギ、オオバヤナギ混生林が報告されている（栃木県 1979）。

9) ハイマツ群落（アカミノイヌツゲクロベ群集ハイマツファシス）

コケモートウヒクラス域は風衝作用が強く亜高山針葉樹林の成立しえない極端できびしい立地条件になっている山頂や稜線付近にはハイマツ群落が成立しており、潜在自然植生としても現存植生域がほぼ一致している。鹿又岳および日留賀岳と両者の間の稜線に沿って生育している。

10) ナナカマドーミネザクラ群落、ホツツジーシロヤシオ群落

ハイマツ群落の立地よりも風衝が緩和された立地にはミネザクラ、ナナカマドなど夏緑広葉樹の風衝低木林であるナナカマド—ミネザクラ群落が生育しており、同時に潜在自然植生として認められる。鹿又岳や日留賀岳の稜線付近に潜在自然植生域を持つがその面積は狭い。ブナクラス域の風衝地にはホツツジ—シロヤシオ群落が潜在自然植生として考えられるが、その面積はわずかである。

11) ネコシデーヤハズハンノキ群落, ニシキウツギ—ミヤマヤシャブシ群集他

道路建設によって生じた二次的崩壊地で、持続的に崩壊が起っており自然状態での表土復元、立地の安定化が期待されない立地にはネコシデーヤハズハンノキ群落やニシキウツギ—ミヤマヤシャブシ群集などの崩壊地先駆生低木群落が潜在自然植生として考えられる。これら崩壊地先駆生低木群落を潜在自然植生域とする立地は面積は僅かであるが、塩那道路沿いにみられる。しかし、これらの立地でも表土の復元、立地の安定化が計られればシラビソ—オオシラビソ群集やコカンスゲーブナ群落など極相林が潜在自然植生として成立する。

12) クマイザサ群落, チシマザサ群落

代償植生として成立しているクマイザサやチシマザサのササ草原も、気候的環境の厳しいコケモモ—トウヒクラス域においてはシラビソ—オオシラビソ群集などの森林植生への復元はかなりの時間を要する。特に風衝地などでは遷移が停滞し持続群落となっており、潜在自然植生として認められる。ササ草原の潜在自然植生域は鹿又岳の稜線にみられるがその面積は狭い。

13) ハンノキ群落

中塩原では一部ではあるが現在水田として利用されているところがある。水田のような立地は、排水不良による過湿、酸素欠乏などにより夏緑広葉樹の高木林は生育できず、ハンノキの優占する群落が成立する。

14) 自然裸地（崩壊地）

沢の源流や谷頭など連続的に崩壊が引き起こされている立地では、崩壊による強い物理的作用のために植物が侵入できず無植生地、裸地となっている。